

令和8(2026)年度 商学・経済学研究科(修士課程)2月入試

試験科目名:財務会計論

#### 出題意図

この設問では、①取得原価と時価の概念を正しく理解しているか、②資産の保有目的と測定属性の対応づけを適切に対応させることができるか、③信頼性や有用性といった尺度から会計情報の質を考えることができるか、④会計用語を使いつつ、読み手に伝わる日本語でまとめられるか、を問うている。内容としては、財務会計分野の基本概念を問う基礎的な問題である。

#### 模範解答

事業用資産は、工場・機械・店舗など生産や販売といった本来の企業活動に継続的に用いられるものであり、売却して利益を得ることよりも、使用を通じて将来のキャッシュ・フローを生むことを目的に保有されている。これらは個別性が強く、活発な市場が存在しない場合も多いため、期末ごとに時価を求めようとするが見積りに依存し、測定誤差や恣意性が入りやすい。また未実現の評価損益により利益が大きく変動すると、事業成果の把握を妨げるおそれがある。そこで、証憑に基づき客観的で検証可能性の高い取得原価を原則的な評価基準とする。

一方、余剰資金の運用として保有する金融資産は、換金・売却可能性が重要であり、現時点においていくらで処分できるかという情報が投資判断やリスク管理に直結する。さらに市場価格が入手しやすく、時価の信頼性も比較的高い。

以上より、資産の保有目的と、会計情報の有用性・信頼性(測定可能性)のバランスに応じて、取得原価と時価を使い分ける考え方が採用されている。

令和 8 (2026) 年度 商学・経済学研究科 (修士課程) 2 月入試  
試験科目名：動学マクロ経済学

### 出題の意図

マクロ経済動学において家計の行動を理解する上で必須のオイラー方程式が導出できるか、さらにはそのオイラー方程式から消費に関してどのような結論を導けるかを問う問題である。

### 解答

問 1 の答え

$$d = -(1+r)c + (1+r)y$$

問 2 の答え

$$V(c) \equiv u(c) + \frac{1}{1+\rho} u[-(1+r)c + (1+r)y]$$

問 3 の答え

効用最大化の一階条件

$$V'(c) = 0 \Rightarrow u'(c) + \frac{1}{1+\rho} u'(d) \times \{-(1+r)\}$$

合成関数の微分

$$= u'(c) - \frac{1+r}{1+\rho} u'(d) = 0$$

$$\Rightarrow (1+\rho) \frac{u'(c)}{u'(d)} = 1+r$$

オイラー方程式

これより

$$1 + r = (1 + \rho) \frac{u'(c)}{u'(d)}$$

問 4 の答え

オイラー方程式より、 $\rho = r$ であれば  $u'(c) = u'(d)$  が成り立つ。よって  $c = d$  となり、現在と将来の間で消費は平準化される。

問 5 の答え

消費が平準化されるため、 $c^* = d^*$ 。これを生涯予算制約式に代入すると

$$c^* = -(1 + r)c^* + (1 + r)y$$

これを  $c^*$  について解くと

$$c^* = d^* = \frac{(1 + r)y}{2 + r}$$

となる。

令和 8 (2026) 年度 商学・経済学研究科 (修士課程) 2 月入試  
試験科目名：情報処理論

作問意図 (情報処理)

本学がデータサイエンスに力を入れる中で、Web ベースで API を利用して AI を実装するシステムの設計の学習にも力を入れるべきと考えた。このため、R5 年度と R6 年度の基本情報技術者試験を、Web アプリの開発言語仕様にアレンジした問題を出題した。

回答例

設問 1 ( f ) \_\_\_\_\_

設問 2 ( c ) \_\_\_\_\_

設問 3 ( b ) \_\_\_\_\_

設問 4 ( c ) \_\_\_\_\_